公益社団法人　北海道社会福祉士会

機関紙

かわら版

No.72
2026.2

函館元町地区八幡坂

目　次

1　社会福祉士としての原点と
　　生活困難者支援委員会活動　2～4
2　新人社会福祉士の紹介　5
3　ベテラン社会福祉士の視点　6～7
4　地区支部からのお知らせ　8～9
5　Break time ～三択クイズ～　10
　　数字で見る北海道社会福祉士会　10

―　会員の動向（１月31日現在）　―
○総会員数　1,878名
○入会率　13.18%
○新入会員数（転入含）126名（累計）
○退会員数（転出含）　16名（累計）

発行人　出町　勇人
発行所　事務局
編　集　企画総務委員会
（委員長　佐々木　祐也）

―　会員の皆様へ　―
LINE公式アカウント、
公式Facebook未登録の方は
ぜひご登録ください。

LINE公式アカウント

公式Facebook（フェイスブック）
（https://www.facebook.com/hokkaidocsw/）

〒060-0002
札幌市中央区北２条西７丁目 かでる2.7　４階
TEL.011-213-1313　FAX 011-213-1314
メールアドレス　info@hokkaido-csw.or.jp

UD FONT ユニバーサルデザイン（UD）の考え方に基づき、より多くの人に見やすく読みまちがえにくいデザインの文字を採用しています。

【私の社会福祉士としての原点、生活困難者支援委員会の活動について】

北海道社会福祉士会
理事　近藤　祐二

皆さまこんにちは。道南地区支部の近藤祐二と申します。今冬は各地で雪による交通への影響が顕著で、皆さまも公私において通勤や目的地への移動等でご苦労されていると思います。この記事を書いている2月上旬の時点ではまだ冬の真っただ中ですが、皆さまの安全と春の早い訪れを願っております。

今回、この記事を執筆する機会をいただきましたので、主に私が委員長として関わらせていただいている、生活困難者支援委員会の取り組みについて、多少脱線するかもしれませんがご紹介いたしますのでよろしくお願いいたします。

まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。私は大学を卒業後、福祉とは全く畑違いの民間企業に就職し、約10年間いわゆる「セールスマン」として勤めました。もともと口数も少なく、口下手、性格もどちらかというと消極的な私は、営利企業の中での激しい競争に限界を感じ、退職を考えていたのと同時期に、祖父の他界に直面しました。

祖父は末期の肺がんを患い、家族には約６か月の余命が宣告されました。総合病院にて数か月間緩和ケアを受けていましたが、いよいよ自らの死期を悟ったのか、「家に帰りたい」と希望しました。今思えばなかなか大変なことだったと思いますが、私の父が病院に勤務していたこともあり、祖父の在宅生活へ向け、電動ベッドの設置、在宅酸素やポータブルトイレ、痰の吸入器の導入、訪問看護の利用など、担当ケアマネジャーを中心に比較的スムーズに生活環境が整えられました。結果的に祖父が在宅で生活できたのは２週間ほどでしたが、希望していた在宅で、呼吸が止まるその時まで、ベッドを囲んだ家族一同から声を掛けられながら旅立ちました。日に日にやせ細っていく姿、元気な頃には「俺はいつ死んだっていいんだ」と明るく笑っていた祖父が、「怖い、怖い」と弱音を吐く表情など、見守っている家族には辛いことも沢山ありましたが、最期は家族で手を握り、声を掛けながら送れたので、現在でも私たち家族はそのことを誇りに感じています。

ただ、そこで感銘を受けたのが、祖父の在宅生活の実現に携わっていただいた医療・福祉の方たちのご尽力であり、私が社会福祉士を目指すきっかけとなりました。

その後、間もなくして会社を辞め、翌春より福祉の専門学校へ入学し、３年間学んだ後、平成26年に社会福祉士を取得しました。実習などでの縁もあり、地元の地域包括支援センターへ就職し、約９年間高齢者福祉や生活困難者支援に従事し、高齢者虐待対応や認知症高齢者への支援など様々な経験を積むことができました。併せて、基礎研修の修了や認定社会福祉士の取得もしていたこともあり、令和６年の春からは、名ばかりですが独立型社会福祉士として、主に成年後見人等の受任を業として活動し、現在に至ります。

社会福祉士会での活動については、災害対策委員として２期務め、その後、道士会の理事に就任させていただき、今は２期目になります。２期目のスタートと同時に、

生活困難者支援委員会の委員長となりましたので、この機会に活動の一部をご紹介させていただきたいと思います。

まず「生活困難者支援委員会」についてですが、ざっくり説明すると、高齢者、障がい者、児童などの分野・制度にかかわらず横断的なテーマや制度の狭間、新たな社会問題にも焦点を当てて取り組みをする委員会となります。生活保護法や生活困窮者自立支援法に関する問題だけでなく、孤独・孤立、自殺、ヤングケアラー問題など無数に存在する課題への取り組みを担っております。

具体的な活動として、今年度も開催した「ちょっと聴きたい連続講座」についてご紹介いたします。当委員会では、当会の会員だけでなく、興味を持たれたすべての方が気軽に学び、様々な社会問題について考えるきっかけになる場として連続講座を開催しています。この講座はオンライン形式で年数回開催され、毎回、生活困難者支援に関する様々なテーマで、最新の状況や課題となっていることなどを専門家等によって解説いただく講座です。過去には、ひきこもりや8050問題、生活保護、多様な性などをテーマとして扱っております。

今年度については全３回開催し、「ハンセン病」、「宗教二世」、「アイヌ民族」をテーマとして実施いたしました。ハンセン病については当委員会の設立当時から取り組んでいる問題で、現在も札幌弁護士会や市民団体が参加する「北海道のハンセン病問題に関する協議会」に定期的に参加し、ハンセン病問題の周知に関するイベントへの参画などを行っております。講座のテーマとした理由としては、委員会メンバーの入れ替えもあったことで、基礎から学ぶ、周知を継続していくという意図で、講師には実際にハンセン病の元患者が暮らす国立療養所・松丘保養園への訪問にも参加した道南の横山委員に担っていただき実施いたしました。

次に「宗教二世」についての問題ですが、北海道大学大学院の櫻井義秀特任教授に講師を担っていただきました。昨年度、道士会の方へ先生からアプローチいただいていたことをきっかけに実現いたしました。先生は旧統一教会問題をはじめとして日韓中の宗教文化やタイの地域社会開発などを研究されており、講座の当日にもちょうどニュース等で話題となっていた、山上被告（安倍元首相銃撃事件）と先生が接見した際の状況や事件に至るまでの背景など、第一線で活躍されている専門家ならではのお話が盛りだくさんで、時間が短く「もっと聴きたい」という声も多数寄せられました。

「アイヌ民族」についてですが、この記事を執筆時点ではまだ講座の実施前なので当日の内容については触れられませんが、テーマ選定したきっかけとしては、昨年の10月４日に白老・苫小牧市で開催された「全道会員交流会」からの流れで決定しました。交流会当日にはかわら版の前号で掲載の通り、宇梶静江氏の講演の他、ウポポイの見学会もありましたが、よりアイヌ民族について知っていただくきっかけとなればという思いからでした。講師については、企画当初は全くあてがありませんでしたが、ネット検索したところ「北海道大学アイヌ・先住民研究センター」にたどり着き、直接電話で依頼したところ、北原モコットゥナシ教授に引き受けていただく

こととなりました。

（ここから脱線します）まずは、講師が決定しホッとしたと同時に、先生の名前を見て、ご自身もアイヌ民族の方なんだなぁと思い、再びネットで検索しました。すると、多数の著書の他、『ゴールデンカムイの監修に携わる』との一文があるではありませんか！この時点ではゴールデンカムイを知らなかった私のミーハーな心に火が付き、当日、コミックを２冊だけ買って読んでみたところ、沼にはまってしまい、すぐに全巻読破してしまいました。

年末年始にかけては、某サブスクでアニメと実写版も無料放送されていることに気づき、約１か月かけて全部制覇してしまいました。（コミックやアニメのスタッフロールには、アイヌ設定監修として先生の名前がしっかり出ていました）

さらに、より深くアイヌ民族について知りたく、先生の著書も複数冊購入し、年明けの１月上旬には平取町の二風谷アイヌ文化博物館を訪問し（ほぼ貸し切り状態！）、翌日にはウポポイを再訪する「一人旅？聖地巡礼？」を敢行し、現在もその熱は冷めずに過ごしております。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館

（脱線から戻ります）連続講座の開催目的にも関係する点として、まずは自分が様々な社会問題に「興味･関心を持つ」､「自らの意志で知る・調べる」ことがとても重要と感じました。

当委員会で扱う諸問題については、いわゆるマイノリティーに関する問題が多く、それこそ大きな選挙などにおいては、触れられもしないことが多く、報道などでも解決に向けて適切に取り上げられているとは思えません。もちろん、それらについてもすぐに問題が解決する特効薬があるわけではないのも事実ですが、まずは数や規模の大小ではなく、生きづらさや苦しんでいる方が実際に存在している問題に、私たちが「関心を持つこと」にこだわって､その機会、きっかけを作れるよう委員会活動をしていきたいと思います。

ウポポイ

【新人社会福祉士の紹介】①

氏名：永瀬　充（50歳）
所属：道北地区支部

私は2012年に社会福祉士の資格を取得し、同時に社会福祉士会に入会したのですが、その後福祉分野から離れる転職をしたため一度退会し、昨年再び入会させていただきました。

私が福祉分野の仕事を目指そうと思ったのは、20代前半に美唄市にある道立身体障害者リハビリテーションセンターで勤務したことがキッカケでした。私は庶務課だったため直接支援の業務はありませんでしたが、同年代の入所者と日々話をしたり生活の様子を見る中で福祉の勉強をしたいと考えるようになりました。その後、障害者自立支援法施行に合わせ旭川で障害者相談支援の仕事をするようになり様々な障害のある方たち、ご家族の相談を受け生活サポートや福祉サービスの利用支援に関わらせていただきました。また、私自身手足に障害があり、長年パラスポーツ活動に取り組む中で、障害のある人たちへのスポーツ普及にも取り組んできました。

現場のブランクが少しありますが、また福祉に関する仕事や活動に取り組んでいきたいと考えています。今後皆さんと研修会などで顔を合わせる機会が出てくると思いますが、情報交換をしたり一緒に福祉を考えていきたいので、どうぞよろしくお願いします。

【新人社会福祉士の紹介】②

氏名：小野田　葉子
所属：十勝地区支部

現在の地域包括支援センターに介護支援専門員として平成29年に入職し、令和２年に社会福祉士の資格を取得しました。

地域包括支援センターでは、多種多様な相談があり高齢者やご家族の支援を行ってきましたが、知識や相談援助のスキル不足を感じ、社会福祉士の資格を取ろうと一念発起しました。仕事と勉強の両立は大変でしたが、職場の方の応援もあり無事に合格することができました。

地域包括支援センターでの相談業務では、高齢者の方々の課題が多角的で複雑なケースも多くあり悩みながら業務を行っています。その中で制度や地域社会の理解は必要不可欠であると実感し、支援を通し日々学ぶことや感じることがたくさんあります。また、自分の力だけでは解決できないことが多々あり、関係機関や多職種との連携は欠かせないため繋がりの大切さを感じています。

まだまだ知識不足ではありますが、高齢者の方が住み慣れた地域で最期まで自分らしく暮らしていけるように、相談者一人ひとりの思いを大切にし、支援していきたいと考えています。社会福祉士の研修や先輩社会福祉士の皆様から多くの知恵を学び努力していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

【ベテラン社会福祉士の視点】①

氏名：羽田　三紀子
所属：オホーツク地区支部
有限会社コミュニティ
看護小規模多機能ホーム
ひなた

私は、看護師として長年医療機関や高齢者介護施設等に従事しておりましたが、介護保険施行を機に介護支援専門員となり活動の場が臨床現場から在宅介護支援に大きくシフトすることになりました。そして私の仕事は対人援助業務が中心となっていったのでした。

しかし介護支援専門員として生活の視点を持ってケアマネジメントを考えるほどに社会福祉に疎い自分を痛感させられるようになり、少しでも自分の相談援助技術のスキルアップに繋がるのではないかと考え2006年に社会福祉士資格を取得しました。社会福祉士の学習を進めていく中、その倫理観や成年後見制度等を学んだ事で、資格取得後は実際に成年後見人となり医療や介護保険制度以外の分野でも活動する意欲も高まっていきました。また私の住む地域では数少ない社会福祉士仲間の活動のお手伝いができればと思い地区支部の役員にも手を挙げて職能団体としての活動の様子も知ることができました。

2009年には認知症介護指導者となり、特に認知症高齢者の権利擁護をテーマに高齢者虐待防止法の周知活動に力を入れてきました。

こうして私は、看護師として、社会福祉士、精神保健福祉士として多面的な知識や技術を持つことで地域では様々な活動ができるようになり、医療と福祉の連携や地域に必要な社会資源の構築にも積極的に関わろうと考えるようになりました。

医療、福祉の両輪を持って地域で自分のできることをやっていこうと、社会福祉士の立場で紋別市成年後見センター立ち上げに関わらせていただいたり、市民後見養成研修の講師を務めさせていただいたり、紋別市の技能実習生や特定技能外国人の権利擁護についても色々関わらせていただくようになり、ソーシャルアクションを起こす原動力は看護師というよりは社会福祉士としての意識が強いのだと自覚するようになりました。

そして、これらの経験により、私は社会福祉士、看護師としての対人援助職は、自分という人間を使ってその業務を遂行していく職種であり、援助者である自分自身をどのように磨き続けていけるのかがその援助の良し悪しに直接関わる大切なことだと考えるようになりました。

自分という個性を使ってどのように目の前の人と真摯に向き合っていけるのかという課題が一番難しい事であると実感しています。自分の人生も含め、沢山の経験の中で自己覚知を進めながら、自分の人間性、器の大きさを意識しながら、少しずつでもいいから大きくしていこうという気持ちを忘れずにこれからもできることをやっていきたいと思っています。

【ベテラン社会福祉士の視点】②

氏名：浜尾　勇貴
所属：釧根地区支部
社会福祉法人
北海道社会福祉事業団
なかしべつ地域生活支援センター
根室圏域障がい者総合相談支援センター「あくせす根室」
なかしべつサポートセンターよりそい

私は、根室管内の中標津町を拠点に、障がい分野の地域づくりコーディネーターや相談支援専門員、生活困窮者自立支援の自立相談支援などに携わっています。

40代後半。髪は薄くなり、白髪も増え、手元も見えにくくなって身体的な変化には「ベテラン」を感じますが、知識や人間性等、中身が伴っていない中、年を重ねるだけで「ベテラン」になってしまうことに居心地の悪さを感じています。

会活動では、司法分野との連携特別委員会の学習会（11月）、根室管内社会福祉士交流会（11月）、PMC担当（12月）、道東のつどい担当（１月）、権利擁護セミナー担当（２月）、この原稿作成と立て続けに会活動の担当となり、貴重な経験をさせてもらっています。

気が付くと相談支援という分野で20年近く『支援』に携わらせてもらっており、経験だけは長くなりました。ただ、今も『「支援」とは？』に日々悩みながら、答えの出ない中、実践を繰り返しています。

そして、最近、「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉を耳にする機会が増えました。「結果がでないことや見えにくいこと」「解決できない課題」は多く、持ちこたえる力や対象者に寄り添い、共に時間を過ごすことも大切なのかなと感じています。

こちらが「どうしたら良いのだろうか…」と困っていても、利用者が自らの力で解決していく場面もありました。そのたびに、「本当に必要な支援とは何か」「私にできることは何なのか」と、モヤモヤとした自問自答を繰り返しています。

そんな時に『ライオンを飼いたい』という本を購読し読む機会がありました。（中央法規：大久保薫・大友愛美＝著）

「障害者支援の手前にあるもの」となっていますが、対人援助支援の本質を考える上で、学びになる本で、日々悩んでいたことを改めて振り返るきっかけになりました。きっとこれから何度も繰り返し読むことになりそうです。

是非、みなさんも機会があれば一読してみてください。分野を問わずお勧めだと思います。

制度に振り回されず、対等な関係を目指しながら、職員が満足するための支援ではなく、みんなの「力」を信じ、当事者が本来の力を発揮できるような支援ができる社会福祉士を目指したいと思います。

【各地区支部からのお知らせ】

【道央地区支部】

Ⅰ　地域包括職員スキルアップ研修会

日時：３月７日㈯　13時～14時50分

会場：札幌市社会福祉総合センター

「複合的課題を紐解く『孤立』について」

講師：北星学園大学社会福祉学部教授

　　畑　亮輔　氏

※終了後、会員懇談会（１時間程）を予定。

Ⅱ　会員サロン

日時：３月14日㈯　９時30分～12時

会場：札幌市社会福祉総合センター

「今後の高齢者政策をどう考えたらよいか―全国の動向と高齢者ニーズを踏まえて―」

講師：NPO法人シーズネット理事長

　　奥田　龍人　氏

※詳細は、地区支部ホームページでご確認ください。

【道北地区支部】

○2025年11月29日

北海道社会福祉士会道北地区支部　創立25周年記念『秋季セミナー・記念式典　祝賀会』

秋季セミナー：45名参加

日本社会福祉士会　副会長　安藤　千晶　氏

記念式典・祝賀会（表彰式）：49名参加（来賓７名、道北会員37名、道北会員以外６名（重複含））

表彰者：①地区支部長経験者　②幹事・役員歴15年以上の方を功労者として紹介

○2025年12月８日

留萌ブロック研修：42名参加（共催：留萌地域生活支援センター、北海道精神保健推進協会）

○2025年12月12日

高齢者虐待対応ソーシャルワーク研修：25名参加

北海道社会福祉士会　虐待対応専門職チーム

山崎　加代子　氏

【道南地区支部】

道南地区支部では、定期的に成年後見事例検討会と司法と福祉の連携勉強会の他、定例学習会を開催しております。

定例学習会は３回行っており、第１回は湯淺支部長より「任意代理契約について」の講義、第２回は災害対策委員の井口氏より「災害ソーシャルワークについて」委員会活動の紹介も含め講義、第３回は現場実習指導者研修委員である中村氏より「実習新カリキュラムについて」実習指導を担う会員との懇談し、学びを深めました。

道南地区支部は、今後も会員に向けて、社会福祉士としての資質向上に向けた取り組みを進めて参ります。

【日胆地区支部】

日胆地区支部では、地域の実情に即した社会福祉活動の推進に取り組んでいます。

支部では２か月に１回、定例会議を開催し、会員相互の情報共有や研修、課題検討を行っています。

また、日胆地区ソーシャルワーカー協会とも連携し、多職種協働による支援体制の

強化を図っています。令和７年10月４日には2025年度全道会員交流会を開催し、全道各地の会員と交流を深める貴重な機会となりました。１月16日には困難事例支援チームの実践を題材に多職種連携強化・促進事業研修を行っています。今後も地域福祉の向上に努めてまいります。

【十勝地区支部】

十勝地区支部では、11月15日に帯広市内で「社会福祉士セミナー 2025」を開催し、「自分らしい暮らしを地域でおくる」をテーマに、ウェルスリー株式会社の松原健氏、車いすママの千葉絵里菜氏を講師に迎え、50名満員の盛会となりました。18日には名刺交換会第２弾を開催し14名が参加。さらに26日には、Zoomにて権利擁護セミナー「身寄りなし問題」を開催し、須貝秀昭氏の講演に40名が参加しました。12月末には次年度事業計画について地区支部会員との意見交換会を開催。今後も十勝地区支部は、会員が団結し、協力しながら活動を進めてまいります。

【オホーツク地区支部】

12月22日に北見市内で対面にて権利擁護セミナーを開催しました。

一般社団法人日本意思決定支援ネットワーク副代表の水島俊彦氏（弁護士）を講師に「意思決定支援の現在地と未来」をテーマに講演いただきました。事例から「こんな時、あなたならどうしますか？」の問いかけに参加者も隣同士で話し合いをしました。意思決定支援を取り組むにあたっては、最善の利益に寄りがちな「支援者めがね」を外す事が重要であるというお話には深く考えさせられました。とても有意義なセミナーでした。

【釧根地区支部】

釧根地区支部では、12月13日に道東ソーシャルワーク研究会（PMCラボ）を開催いたしました。当日は基調講演を「持続可能な福祉のための人材育成を考える」と題して日本医療大学ソーシャルワーク学科橋本達志氏にお話しいただいた後、北海道社会福祉士会　出町会長、北海道精神保健福祉協会　佐々木会長、北海道医療ソーシャルワーカー協会　山本副会長による座談会とグループワークを行いました。

また、１月31日に「災害時に求められるソーシャルワークの実践力」をテーマとして2025年度道東のつどいを開催しました。

【Break time ～三択クイズ～】

Q. 今年度開催した「ちょっと聴きたい連続講座」でテーマとして
取り上げていないものはどれでしょうか？

①宗教二世　　②ハンセン病　　③ケアラー支援

正解者の中から抽選で３名様に、３千円相当の景品をプレゼントします。
回答及び当選者は次号に掲載します。

【応募方法】

応募フォームまたはメール・FAX・郵送でご応募ください。
応募フォームはこちら⇒https://forms.gle/hjEoeezMGsi2ToSs9

＜メール・FAX・郵送の場合＞

件名を「懸賞について」とし、①氏名　②会員番号　③答え　④本誌の感想などを記載しご応募ください。

応募締切：2026年３月15日㈰　※消印有効
応 募 先：北海道社会福祉士会事務局（表紙に記載）

【前号の答え】

②日胆地区支部

【前号の当選者】

濱名三三子さん（オホーツク支部）、瀬川　知也さん（道央支部）
石川美佐絵さん（日胆支部）
以上の３名でした。おめでとうございます！

【数字でみる北海道社会福祉士会（スーパーバイザー登録者数編）】

30名

スーパーバイザーとして登録している北海道社会福祉士会員は、30名です。（2026年１月末現在）

道内でスーパービジョンを行う会員が活躍されています。

日本社会福祉士会でスーパーバイザー養成講座を実施しています。（2025年度は９月に実施）

詳しくは、日本社会福祉士会のホームページをご覧ください。